# アーケード改修をきっかけに緑溢れる公園のような商店街に

【広島県福山市】

福山本通商店街振興組合

## 福山市政施行 100 周年に向けたアーケード改修

# 福山市の「とおり町」

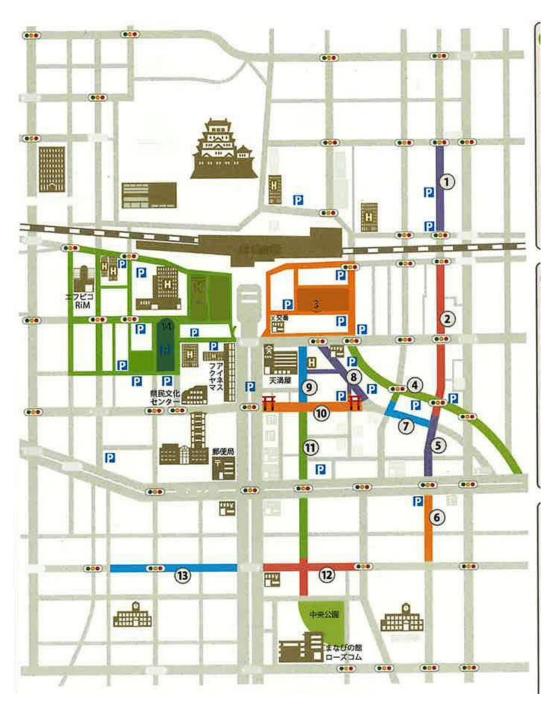
広島県最東部に位置し、県内2番目の人口を有する福山市。この地方の最大のターミナルである福山駅から、7分ほど歩くと福山本通商店街へたどり着く。その商店街は、地域の人々から、「とおり町(ちょう)」と呼ばれ、約400年前、水野勝成公が福山城を築城した時代からその名で親しまれている。このショッピングストリート(商店街)はかつて全長440mの全蓋式アーケードで覆われていたが、2015年に大規模な改修事業が行われ、開放的な公園のような街路として生まれ変わっている。「とおり町Street Garden」と題された改修プロジェクトは、2017年にグッドデザイン賞の金賞を受賞。市街地や商店街の活性化だけでなく、空間デザインの面からも取り上げられるほど注目されている。

今回、アーケード改修に至る経緯やその後の商店街の変化について、福山本通商店街振興組合の髙田理事長、NPO法人わく街家研究所桒田慶子副理事長、福山市役所の渡邊次長、井上主事にお話を伺った。



福山市の位置図

(出典:Google マップ)



福山市の商店街地図(②が福山本通商店街(とおり町))

(提供:福山市)



左から、福山市渡邊次長、桒田副理事長、髙田理事長、福山市井上主事 (上部に 7000 本のワイヤー、樹木がとても多い商店街)

(撮影:中小企業商業課)

# 思考錯誤を重ねたどり着いた新たな発想

従来のアーケードの概念にとらわれない「樹木と石畳とワイヤー式のアーケード」がとおり町に整備できたのは、商店街、NPO 法人、自治体等の関係者が協力し、とおり町にマッチしたアーケードはどうあるべきかを試行錯誤しながら検討や議論を重ねてきたからであると、髙田理事長は語る。

とおり町のアーケードは、昭和 45 年に全蓋式アーケードを設置して以降、改修を繰り返しながら維持管理を行ってきたが、アーケード塗装の剥離等が目立つようになり、屋根もひび割れ、雨漏りをするなど、アーケードの老朽化が進む中、平成 21 年頃から組合内において、アーケードを撤去すべきなのか、それとも新しく立て直すのかなど、本格的な検討が始まった。

まず最初に取り掛かったのが、地域住民向けのコミュニティに関わるアンケート調査と調査結果の分析である。「アーケードが薄暗くて雰囲気が悪い」、「趣味を楽しむ、世代間交流、住民参加等の場所がない」などの意見があった他、「健康、美容、子育て、教育等」に高い関心があることも判明した。

- こうした調査結果等を踏まえながら、アーケードの対策については、
- ①アーケードの新築・改修又は撤去する場合の費用見通し(費用面からの検討)
- ②台風等による事故事例の確認や施工業者の意見徴収(安全面からの検討)
- ③降雨時等による通勤・通学の利便性、直射日光による商品への影響に係るアンケート調査

④天蓋部撤去に伴う降雨時の来街者数の影響やそれに伴う売上高等の影響に係るアンケート調査 を行い、併せて役員会で将来どのような商店街を目指していくか議論を重ねた。

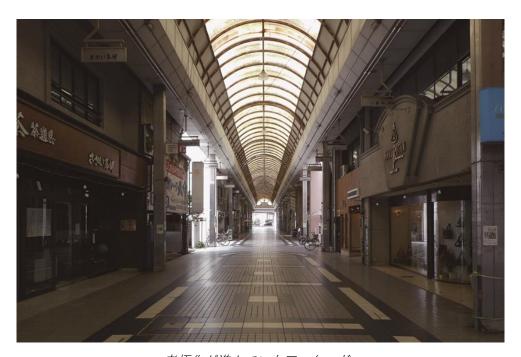
議論を進めていく過程で、費用面ではアーケードを新築する場合 5 億円ほどの費用が必要で、維持管理でも年間 100 万円、10 年に 1 度、1~2 億円規模の大改修が必要であることが判明。後継者がいない店舗が全体の 7 割を超える福山本通商店街では、建築費の返済や建築後の維持管理は困難との意見が大半を占めた。

また、降雨時等における通勤・通学の利便性等は低下するものの、それ以上に歩行者の安全性を最優先として取り組むべきとの意見も大半を占めた。

加えて、天蓋部撤去に伴う降雨時の来街者数を懸念する声がある一方、アーケード改修とその後の再整備で現状を脱却し、新たな商店街に生まれ変わるのではとの期待も高く、最終的には、四季を感じる緑の多い庭園樹木と白御影石の街路を配し、自然環境を重視した持続可能な街づくりをしていこうということで一致した。

さらに検討結果を踏まえ、アーケード撤去後の各店舗の雨仕舞や屋根の修復はそれぞれ各人の自己負担とすることを全員協議会にて事前に取り決め、費用面や安全面から大きな負担となる天蓋部は撤去のみ行い、アーケードの柱は先人たちの財産や思い出の継承として再利用するという、独特の改修方法で行う方針をまとめた。

なお、平成 28 年が福山市政施行 100 周年であったため、このタイミングに合わせてリニューアル (改修) できるよう目標時期を設定した。



老朽化が進んでいたアーケード

(提供:(株)JDN)

#### 7000 本のワイヤー式のアーケードと植物の植樹

### ワイヤー式のアーケード

これまでの議論を踏まえ、アーケードの天蓋部の撤去を行う方向性が見えてきたものの、現在のワイヤー式を採用するに至るまでは簡単な道程ではなかった。

最初のきっかけは、平成 26 年頃、北村前理事長が将来に向けて商店街が目指していく姿を思案していた中、地元の保育園である「こどもえんつくし」(広島県福山市)のダイニングホール棟「forest カランころ」(※)を見て、このような緑溢れる商店街にしたいと決心したことから始まる。

(<u>\*</u>) <a href="https://www.japan-architects.com/ja/architecture-news/jiao-yu-shi-she/keisuke-maeda-karankoro">https://www.japan-architects.com/ja/architecture-news/jiao-yu-shi-she/keisuke-maeda-karankoro</a>

地元の建築デザイナーである前田圭介氏にデザインを依頼し、「こどもえんつくし」のような緑溢れる公園のような商店街にしたい旨の希望を伝え、天蓋部の撤去や柱部分を残す独特な改修をする方向で相談を行った。

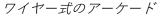
その後、平成 27 年頃まで前田氏と商店街で意見交換等を継続し、前田氏からは「雲をイメージした 天蓋部にしたらどうか」など複数の提案が出されたが、撤去された天蓋部に 7000 本のワイヤーを架け る斬新なデザインが最終的に採用された。

また、アーケードの天蓋部の撤去を行った後のまちづくりには福山市の協力も不可欠であったことから、福山本通商店街振興組合は、平成25年8月、とおり町の魅力拡大を目指すための方向性を取りまとめた「福山本通地域街づくり計画」にアーケード改修事業を盛り込み、福山市に対して老朽化したアーケードの状況等を説明し、支援措置の協力要請を行った。

具体的には、柱部分が目立たないよう、柱の根本に植樹したり、夜間の防犯灯を設置したり、さらに緑をもっと増やしていくことなど、これらを含めたファザード整備について、市に協力を要請。その後、市と連携してアーケード改修やファサード整備に取り組むこととなった。

なお通常、アーケードは道路内に設置されることから、建築基準法(第 44 条)に基づく道路内の建築物に係る許可が必要となるが、関係部署等にも協議等を行い、今回のワイヤーは屋根に当たらないため建築物に該当しないと判断され、当該許可は不要との整理がなされたことで実現に至った。







柱の根本に植物を植樹

(撮影:中小企業商業課)

### 緑溢れる公園のようなウォーカブルな商店街

### アーケード改修をきっかけに市民参加型イベントを実施

これまでの商店街はアーケードによりどことなく暗い印象を受けていたが、天蓋部を取り外し、ワイヤーを架けたことによって、太陽の光を取り込むことが出来るようになり、明るさが増し、商店街全体の活気にも繋がってきている。北村前理事長が思い描いた「こどもえんつくし」のような緑溢れる公園のようなウォーカブルな商店街に変貌してきたが、ワイヤー式のアーケード改修(平成 27 年 12 月完了)だけでウォーカブルな商店街に変貌した訳ではない。

ワイヤー式のアーケードをきっかけに、様々なイベントをやっていく機運が生まれたり、空き店舗解消等に向け、NPO 法人わくわく街家研究所と連携したこれまでのまちづくり事業で成果に繋がったりと、その相乗効果でウォーカブルな商店街に変貌したのである。

具体的には、イベントは一過性のイベントで終わらないよう市民参加型のイベントに心がけ、令和 4 年 7 月の七夕まつりイベントでは、ワイヤーに処分予定の忘れ物のビニール傘や市民の手作りの牛乳パックで作った LED ランタンを吊るした。ランタンの絵は、市内 17 か所の保育園や幼稚園の園児が描いている。設営等には、広島県にキャンパスを置く近畿大学工学部の学生が担当。夜の商店街を幻想的に照らし、以前の七夕まつりにも増して大きな賑わいに繋がった。

また、例年3月にとおり町で開催されている「福山まるしぇのマルシェ」イベントでは、パンのマルシェ(福山ブランドに輝いた手作りパン)、ロハスなマルシェ(自然素材を使った体に優しい雑貨・食材、ハンドメイド品)、グリーンなマルシェ(花と植物を楽しみ、植物の持帰りもあり)、アンティークとブックマルシェ(レトロな雑貨、絵本や文庫)が、福山本通商店街周辺で開催されるとともに、併せて、「まちの森おんがく祭」も開催されており、遠方からの来街者も拡大するなど、賑わい創出に大きく寄与した。



七夕まつりイベント

(提供:福山本通商店街)

#### まちづくり事業の成果と商店街の魅力拡大

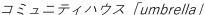
福山本通商店街振興組合では、平成 23 年から空き店舗解消に向けた再生計画に取り組んでおり、平成 24 年からは、NPO 法人わくわく街家研究所と連携したまちづくりに取り組んでいる。

NPO 法人わくおく街家同研究所では空き店舗バンク制度を確立し、最初の店舗として市民参加型のコミュニティ店舗「まちなか情報室ぜっぴ」を整備。誰もが気軽にリサイクル品やハンドメイド品を販売できる会員制のボックスストアであり、主婦層を中心とした約 150 人の地域住民が商品を出品。地域のコミュニティの核としてのにぎわい創出拠点のひとつとなっている。

また、平成 27 年には洋傘店だった空き店舗を改修し、若者層の交流施設「コミュニティハウス umbrella」を整備。木造 2 階建ての建物で、1 階は喫茶とボックスショップ、2 階は大小 6 部屋のチャレンジショップ。現在、チャレンジショップには、商店街での創業を希望する若者 3 組が営業している。

「コミュニティハウス umbrella」は、入居者と商店街や地域との交流の場となっており、これまで商店街との関わりが薄かった若者層の取り込みにも繋がっている。







まちなか情報室「ぜっぴ/

(撮影:中小企業商業課)

#### 20 店舗の新規出店と最適なテナントミックスの実現

福山本通商店街ではアーケード改修等をきっかけに、①市民参加型による商店街のイベントが充実してきたこと、②NPO 法人わくわく街家研究所の交流施設・情報発信拠点等の取組で空き店舗解消に繋がってきたこと(新規に 20 店舗出店)、③福山市の協力による樹木等の植栽などの整備を実施してきたこと。こうした取組の相乗効果が商店街の魅力を一層高める結果に繋がってきている。

最近では、シェアキッチン・レンタルスペースとコワーキングカフェの複合施設「イマノマ」が令和5年5月にオープンし、イベントや会議等で利用できる多目的スペースを貸し出すとともに、イベントや貸切り利用がない日はカフェとして利用するなど、商店街を訪れる人々が滞留・交流できるスペースを確保。

また、造園会社「そらや Landscape」は、オフィスとレストランの複合施設を令和 5 年 8 月にオープンし、ビル 1 階の入口側に造園の相談や打合せを行う事務所に加え、小さな洋風レストランを整備。事務所内には緑が多く、水も流れているなどかなり趣のある造りになっている。

こうした取組により、商店街を訪れる来街者も若年層や子育て世代が増加するなどの変化が見えてきたと高田理事長は語る。これまでになかった新たな業種や業態の店舗が少しずつ増え始め、今後も商店街の魅力拡大と最適なテナントミックスの実現を目指していく。

加えて、商店街、NPO 法人、自治体等の関係者の連携が上手く噛み合った体制が整ってきたので、大きな成果が得られたものと考えられる。結果的にワイヤーはそのまちのシンボルとなり、そのシンボルを中心に人が集まり、人が協力し、また、新しい人が集まってきている。



キッチン・レンタルスペースとコワーキングカフェ そらや Landscape の森田健吾社長(左から 3 番目) 「イマノマ」の田口さん

(撮影:中小企業商業課)



藤岡莉沙部長 (一番左) (提供:そらや Landscape)